

貧乏国は頭を使え

三菱電機中央研究所長 喜連川 隆

使い捨て、消費者王様、レジャー産業大繁昌、世は正に昭和元禄ノそこへドカンと来たのがオイルショックで、忽ちの内に物価は狂乱上昇し、之が鎮静化の総需要抑制策で倒産及び失業は急増すると云う具合に、日本はいとも簡単にインフレと不景気とのダブルパンチを喰った。もう良い加減に米独にお付合いをして金利を下げるとか、成長優先よりも環境生活優先に切り換えようとか色々議論はあるが、日本人として先ず感じた事は、日本は死ぬか、資源国の奴隷になるかより他にない様が無いと云う事である。

日本は西を向いては油を下さい、東を向いては麦を下さいと云っているが、外国に施し与えるものがない。欲しい欲しいと云うだけで、施し与えるものが無ければ奴隷になってもものを貰うか、貰えずに死ぬかし他にない。なるべく欲しいと云わない為には生活を最低限まで切り下げる事、身の程を知らぬ贅沢は止める事。資源の無い日本として、外国に施し与える事が出来る様にするには何うすれば良いか、蓋し科学技術より他には何も無かるう。当世風に甚だ賤しい云い方をするならば、この技術が欲しければ当方の云い値で米をよこせと云って、相手がハイと云う様な技術を有つことである。

然し、誠に残念乍ら、日本は未だに技術輸出よりも技術輸入の方が相当多い。製品輸出の面では日本は可なり優位に立っているとは云うものの、輸出製品の殆んどすべてのものが外国特許と、輸入技術とで作られている。嘗て日本が低開発国の頃には、自分の頭を使うよりは他人の頭を借りる方が手取り早やかかった。だから技術導入一本槍で来た。

処が、第二次世界大戦が始る少し前になると、日本の識者は、真に恐いのは学術封鎖であって海上封鎖ではない、勝つ為には技術とそのも

とになる科学が一番大切である、これを外国に頼っている様では必ず負けてしまうと云いだした。それにも拘らず科学技術のない日本が思い上って戦争をして負けた。今また自ら創造した科学技術を有ため日本が公害無視、資源乱費の拡大均衡昭和元禄をやって、インフレと不景気とのダブルパンチを喰うに至った。要するに日本人もいよいよ頭の切り換えをして、自分の頭を使って、創造的な科学技術上の仕事をする必要に迫られている。

日本人は怠け者だから自分の頭を使わなかったか、それとも、使って利き目がある程の良い頭を有っていなかったために使ったにも拘らず使った効果がなかったのか？怠けたわけではないが頭を使わなかったらしい。アメリカやドイツの研究機関を訪問すると、団栗の丈競べがこんなに沢山いて、よくもまあこんな立派な研究が出来たなあと思う事が屢々ある。技術者の平均的レベルは何うも日本の方が上の様な気がするが、彼等の中には甚だ優れた人材が、恐らく1,000人に2~3人はいて、これが凡庸を上手に使う、また使われる方は恰も川を泳ぐ目高の如くリーダのあとをついてゆくのが実にうまい様に思える。一方、我国では1,000人中の2~3人と云うのが案外なくて、秀才と呼ばれる人種が沢山居る。多くの秀才は勉強するのに忙しくて、自分の頭を使って仕事をする暇がない。何か仕事をする必要が出て来ると先ず外国雑誌の論文を読む。成程良く解ったと云う処で仕事に取りかかろうとするとチャンピオンデータの出た別の人の論文が目につく、そこでまたこれを読んで勉強をする。そのうちにまたもっと立派なデータの載った論文が見つかる、また勉強と云う訳で、博学多識にはなるが何時までたっても自分の頭で仕事をする暇が出来ない。

然らば何故、仕事の出来ないまま、一生勉強

をし続ける秀才が出て来るのか、学校の所謂詰め込み教育も一考を要する時が来たのではなかろうか。明治時代に大学を卒業した人は物理と云えば独楽の運動と蒸気機関だけしか教わらなかったそうだが、その後教わるものがどんどん増えて、遂に最近に到っては原子核、半導体物性、電子計算機などと何れ一つを考えても大変である。色々な事を整理して頭の中に入れておくと、結果に於いては頭は教科書の代用で、この教科書が古くならぬ様に一生勉強を続けねばならぬ事となり、ものを考えている暇がなくなるのは当然である。学生の頭に色々な事を詰め込むのは今や量的にも限度に来ているのではなかろうか。

学士、修士、博士課程の終了は夫々、満 23, 25, 28 才である。ここらで実社会に出て仕事をしようかと云う事になるが、こんなに永く勉強ばかりしていたのではもう遅い。即ち、技術の基礎となる科学を例にとれば、ニュートンの

三大発見、光の分析、万有引力及び微積分法は総て彼が 23, 24 才の頃にその芽を発したと云われており、ヘルムホルツのエネルギー保存則 (1847) は 26 才、マクスウェルの電磁理論 (1855) は 24 才、アインシュタインの特殊相対性理論 (1905) は 26 才、ハイゼンベルグの量子力学 (1925) は 24 才で、凡そ偉業をなし遂げた人は大体 25 才前後で大成してしまっている。

学校の制度も多少変えて、何も彼も平均的に良く出来る事を望む凡人コースは程々にして、何か一つ非常に良く出来たら平均点に拘らず卒業 O K の天才コースを作る事を真剣に考える必要があろう。詰め込みを少くし、考えることを教え、天才とまでは行かなくとも 20 乃至 30 才台で、何か一仕事、科学技術の独創的な仕事を出来る人材を 1,000 人に 2~3 人は作る事が貧乏国日本に必要なものである。日本には頭脳以外の資源がない。